

あそ

6

2009



聖蹟桜ヶ丘





處十分痛処

保多孝三著『柞廬印存』(一) より  
昭和 28 年 日展

中国の「従容録」(1223年)の、「十分の痛処是誰か遭わん」より。「十分の痛処」は言語でも思慮でも及ばぬ処、ここだという処。会得する意とある。

勢いを押へた印刀がゆっくりと進む。たちどまり、曲る。十分に取られた朱面がゆったりとありあじはひ深いものにしてゐる。「十」に区切られた四ヶ所の余白の割合が殊に面白い。(佐藤喜孝)

あを

六 月



新 宿

本町三 佐藤喜孝

新宿に潮満ちてきし朧月  
新宿霾天大和金剛屹立す  
白梅やむかしくの刀きず  
春曉や水に捨てゐる桶の水  
春の雨乾きはじめの道がすき

〔俳壇〕5月号より

満月の光伴ふ花吹雪  
月あかり桜の魔力摩訶不思議  
藤重くベンチにベレー帽ひとつ  
薬師寺の牡丹の便り聞き役に  
夏近し手作りハムにチップの香

中井 森山のりこ

落  
合  
森  
理  
和

湧水の岩間石間に蛙啼く  
春の風座右に備ふる鉄亜鈴  
若草や小高き処くぢら山  
石五つ飛んで渡つて春の川  
若草や寄り添ふ翁糸垂らす

ぶらんこの揺れの残れり宵の庭  
花過ぎや淡紅色の用水路  
花人をよけて急げり絵画展  
期せずして愚痴となりけり桜餅  
風光るつま先立ちで待つ信号

東  
大  
宮  
山  
莊  
慶  
子

はな

鍋屋横丁 吉弘恭子

かんばせをすつとすぎたる花の影  
うぐひすのうしろの闇にもの申す  
唐草の風呂敷包み草団子  
櫻さく音はかすかに池はたて  
あしあとに足跡のせて花の径

噴水

西浦和 渡邊友七

月おぼろ独房のごと寝おちたり  
まろき雲一つ浮べて春はゆく  
草萌ゆる坐せば悔ある人となる  
花咲くも半眼に在す観世音  
噴水に風のきらりと柩車来る

いくたびも風乗換へる紋白蝶  
どの猫も黒猫となる朧月  
高層に回収車の声遅桜  
招きしかつけ込まれしか春の風邪  
暮遅し「いい日旅立ち」聞いてをり

清  
瀬  
赤座典子

### 回 転 木 馬

父の日やいつもの回転木馬かな  
天牛の呪文はきかぬ子供の眼  
鉄線花昔質屋の門構  
桜餅ますます姉御母に似て  
味噌汁は少し濃い目に夏葱を

曳  
舟  
遠藤  
実



逗子 鎌倉喜久恵

花の下声美しき人と会ふ  
川の面を埋めつくせる花筏  
老幹の瘤に短き花の枝  
鳥の声包むで八重の咲き誇り  
図書館の窓を落花のかすめとぶ

虚子展

川崎・小栗 木村茂登子

虚子展や港が見える丘の春  
春風の軌跡か虚子の筆の文字  
絶え間なき虚子の朗読春ねむし  
春眠のやうなる虚子のデスマスク  
行く春や虚子展終の日となりぬ

直立の今にはじけむ葱坊主  
満開の花慌し旅衣  
あっぱれな晩年であり花吹雪  
母くれし脳トレの本柿若葉  
危ふげなスカートの丈春の風

白  
金  
齊藤裕子

フランス山と子規・虚子展

京  
橋  
篠田純子

蟻ン子と領事館跡検証す  
コンクリの中に海這ふ春紫苑  
霧笛橋から残るみかんへ蝶渡る  
いつまでも春なり虚子の旅靴  
勲章の胸に在る日や暮の春

蓋置に五徳の隠架四月かな  
會釈してはて誰ならむ落椿  
直立の童謡の子等手毬花  
軽やかにおしやべりな風花菜畑  
柳の芽下谷に古き組紐屋

千駄木 芝 尚子

雀の子

隠しごと少しはありぬ四月馬鹿  
春深し金鷄勲章残し逝く  
エイサ舞ふ幼ひたむき花の下  
雀の子お地藏様の肩を借り  
雀の子転げるやうに朝の寺

宝仙寺前 芝宮須磨子

植木市

つるぎちひだして  
劍地東出

定梶じょう

濡れてゐるところや植木市果てて  
春塵の街を玻璃越し楽器店  
靴といふ字を率て気球山笑ふ  
一縷なほ羽搏つよ帰雁海の上  
蛇穴を出でてたまたま日曜日

お隣に赤ちゃんの声青木咲く  
六十年生きて出逢ひし滝桜  
福島の四月旬五の花の山  
はなびらでおほひつくせし東川  
行く春や五十七の訃突然に

所 沢 須賀敏子

紋白蝶日だまりに飛ぶ力溜め  
紋白蝶菜の花の黄を身の内に  
人はみな菜の花の黄に吸はれゆく  
挨拶を交しながらの花の道  
筍と友の近況届きたる

哲学堂の老桜ふくらみつつあらむ  
枯草をあたたかさうに猫埋もる  
動物園大きな蠅の生れつぐ  
万愚節うからやからの減りたるよ  
春のうつ不連続線にさいなまれ

葉 桜

田 端 田中藤穂

鶯やいつも小暗き四疊半  
紫木蓮散りて隠棲めく日々に  
観覧車葉桜の地へ戻りけり  
苺潰す回想苦きこともあり  
春睡の醒め今日中にすべきこと

華 鬢 草

三 光 坂 東 亜 未

新緑や消すことも絵を描くこと  
蒲公英の萼に和と洋風任せ  
釣瓶なき深井戸にをる天道虫  
華鬢草過去あるごとく井戸覗く  
初蝶が隠者のごとく脇通る

日 差

内庭に日差は弱し一輪草  
風出でて日暮の明り二輪草  
花の昼さくらいろして童かな  
花の雲民家の屋根を覆ひたり  
花吹雪舞台に主役多すぎる

富 田 長崎桂子

新駅に溢れんばかり新入生  
群なして春の鴉のにぎやかに  
春耕の田に惜しげなく水張られ  
子育てに一途となりぬ猫の恋  
花虻の主張はげしき羽音なり

大 宮 早崎泰江

町屋 藤野寿子

春暁の二羽もつれつつ雨に啼き  
春嵐きっぱり西から晴といふ  
ゴールデンウイーク予報土縞ネクタイ  
春耕の二人快速に手を振って  
もんきてふ風に這松登山口

紫陽花や瞬きすればまばたきす  
見せしめのシャッター通り梅雨晴間  
席ゆづられし礼深々と春愁ひ  
杉花粉老婆五人の箸つかひ  
いよいよ立退き長かった戦後の夏

河田町 堀内一郎



## 五月作品より

王岩・佐藤喜孝

盆栽のやうに地球へ手を入れる

佐藤喜孝

鉢植えにされた、樹姿を整えて自然の雅趣を表した鑑賞用の植物を「盆栽」と言い、唐の時代に行われていた「盆景」が平安時代に日本へ入ってきて始まったものである。盆栽は小さな鉢という限られた空間に自然の雄大や精神を造形する芸術であり、枝の剪定、断根や芽つみなどで美しさを保つ。最も愛好家が多いのは松で、その樹形には直幹、斜幹、蟠幹、模様木、文人木、吹流しなどがある。盆栽は植物の成長に合わせて何世代にもわたって丹精される。

地球は私たち人類の故郷である。人類初の無重力宇宙空間を飛行したソ連の宇宙飛行士ガガーリンは大気圏外から見た地球の美しさに感動し、「地球は青かった」と言った。この美しい地球は現在、地球に生を受けている人類によ

る地球環境破壊という恐ろしい問題に直面している。地球温暖化、酸性雨、オゾン層破壊、海洋汚染、森林破壊などなどの問題は、確実に地球環境を悪くする一方である。

そのような地球の保護を盆栽の手入れに擬えるところは奇抜な発想である。

私たち人類の故郷である地球には危害を加えるのではなく、丹精して育てた盆栽のように、手入れしなければならぬのではなからうか。地球イコール私たち人類の故郷に対する並々ならぬ作者の愛情が過遺憾なく表現されている。

「日の本は白浪をもて縁どれり」と、日本列島を掛軸の中に納まるように詠み得た作者は、今度その詩眼を地球に向けて、世界で一番短い詩形である俳句を以て、大きな課題を詠んだ。

穏やかに馬頭琴聞く春の宵

森山のりこ

馬頭琴はモンゴルを代表する民族楽器で、千年以上の歴史を持つ。その先端に馬の頭の彫刻が飾りつけてあるところから、「馬頭琴」という中国語の名が得られたが、モンゴル語では、モリン・ホールと呼ばれ、簡略にホール、或いはチヨール、イキリと呼ばれる。その音色は恰も見渡すかぎり続くモンゴル大草原を吹き渡る清風のように優しくて伸びやかで、「草原のチェロ」と形容される。モンゴル民族音楽の中では、馬頭琴は欠かせない存在である。中国にはモンゴル族が集中的に居住する内モンゴル自治区があるので、馬頭琴は中国人にとって身近な楽器だと言える。

最近、日本でも、モンゴル或いは内モンゴルから来た馬頭琴の演奏家が多く活躍しているようだ。掲句の作者は演奏会などで馬頭琴を聞かされた経験があつたであろう、穏やかな馬頭琴の音色は春の宵にもマッチする。

### 草萌えに顔をつっこむ子犬かな

山莊慶子

春が来た。大地に若草の芽が萌え渡るようになつた頃、団地の近くの公園は一気に活気溢れる場所となつた。サッカーをして遊んでいる子どもいれば、よちよちと歩く幼児を連れている若いお母さんもいる。その中で、人懐こい子犬までも春日遅遅の陽氣を楽しんでいるように歩き回っていて、突然、青々と茂る草の中に顔を突っ込んでいた。

### 野良猫をつつみつくせる春日かな

吉弘恭子

春の陽射しは麗らかで世間の万物を普く照らしている。心のない飼い主に捨てられた猫にまで暖かな光を送る。仄々とした春の一齣が活写されている。

世情に通じた一部の人間は「錦上添花（美しい上に更に美しさが加える）」の事を好んでやるが、「雪中送炭（人の困急を救う）」の事をし

たがらない。それに較べると、貴・賤を厭わず陽射しを平等に射し込む春日影は素晴らしい。

### こゝろ縛す不況の中や櫻さく

渡邊友七

二〇〇八年一月、アメリカカヌーの世界不況は瞬くうちに日本列島に襲い掛かってきた。トヨタ自動車も71年ぶり赤字経営に転落したとのこと。中小企業は猛威を振るう大不況に耐えず、破産したのも少なくない。この不況は直接に人々の生活に響いてきた。悶々とした一年が終わり、年越しして二〇〇九年の年明けを迎えたが、依然として不況の世の中が続く。

しかし、桜はこういう人間界の不況を露も知らずに、春になると、いつもと同じ花を咲かせている。

### 白光を岩に万朶の里櫻

赤座典子

白光を岩に照りつけるように、無数の山桜は白く咲き匂っている。花の香りが満山に漂う春爛漫の眺めである。桜をこよなく愛する日本人

にとつての原風景であろう。

### 鏡には母の顔あり春彼岸

鎌倉喜久恵

春分の日を中日として、前後各三日を合わせた七日間のことを「春彼岸」と謂う。この期間に故人を偲ぶために仏事が行われる。そんな仏事を終えて、傍らの鏡には自分の顔が映される。しげしげと見ているうちに、我が顔には在りし日の慈母の顔が重なり合つて見えてくるような錯覚を起こした。

左手首骨折

### 白隠の片手の公案涅槃西風

木村茂登子

「白隠の片手の公案」とは、「隻手の音声」という江戸中期の白隠禪師（一六八五～一七六八）が創案した名高い公案を指す。この公案は白隠禪師が初めて参禅する者に対して「隻手声あり、その声を聞け」といったのに始まり、両手を相い合わせて打てば、パンという音がするが、ただ片手だけをあげたのではど

んな音をするか、その音を聞き届けよという意味。

白隠と同時代の蕪村は、その『離俗論』において、作句の法を質問した召波に対して、この公案を引用しながら、次のように答えた、

俳諧は俗語を用ひて俗を離るゝを尚ぶ。  
俗を離れて俗を用ゆ、離俗ノ法最もかたし。かの何がしの禪師が隻手の声を聞ケといふもの、則ち俳諧禪にして離俗ノ則也。

ここでは、蕪村は直観的な詩の心法が不可説の禪の悟りと一致するために援用したのだ。

涅槃西風とは陰暦二月十五日の涅槃会の前後に一週間ほど吹き続く軟風。俗に、浄土からの迎え風といわれるが、この風が吹くと寒さが戻る。

掲句の前書で分かったように、左手首を骨折された作者は著名な禅の公案を以て、片手しか利かない自分の状態を表現した。左手首の骨折

という痛々しい経験から、白隠禅師の唱えた「隻手の音声」を悟ったのだ。文字通り「怪我の功名」ということであろう。

さかさまに啄む鳥や梅日和

芝 尚子

春の麗らの庭先。咲き匂う一樹の梅花。どことなく聞こえてきた小鳥の囀りに誘われて、その所在を眼で探してみると、木漏れ日を透かして、梅ヶ枝を爪で掴んだ小鳥が見える。その小鳥は姿勢を逆様にして、頻りに梅花を啄んでいる。小鳥の軽快な動きを的確に描いている句作である。

春時雨大樹諸手を挙げて受く

東 亜 未

大樹が春時雨を喜ぶようにみえる様子を擬人法で捉える句作。青く茂る枝々は恰も手を挙げるように、降ってきた雨を受けている。大樹にとっての心地よい春時雨に違いない。(ここまで王岩)

## 露の臺ほおけてさうだ街に用

定梶じょう

この句が気に入つてゐたので書こうともう一度見たらどこかがおかしい。原稿を確かめたら、ああ、誤植。誠に申し訳ない。ご寛恕下さい。

定評のあるじよう作品に変化が見えてきた。掲句もさうだが、

焼薯の屋台に塀の高きこと

つのがふしぎで桃の節句のこんべいと

ところにより雨のふるとふ金鳳華

など、ここ数ヶ月の作品を読むと、はつきりとは云へないが、肩の力が抜けたと云ふか、かるくなつたと云ふのだろうか、こちらの脳を心地よく刺激してくれる。

「露の臺がほおけ」ることと「街に用」の脈絡のない変化球、とも読めるが、ほおけることと街に用は詩的必然性がある。詩的だから説明

できない。説明できないから詩的である。「さうだ」と膝を打つかとも思へる臨場感が句をいきいきさせてゐる。

## つくしんぼ子供の頃の通信簿

鈴木多枝子

今年の『俳句』年鑑の二〇〇八年度百選（長谷川權選）に

つくしんぼ音の似てゐる通信簿 川崎展宏

があつた。掲句を句会で回つてきたとき展宏句を知つてゐての作かと思つたがまつたく知らなかつたといふ。掲句は仕舞つてあつた自分か子供の通信簿を取りだし懐かしんでゐるのだろう。別に眼前に通信簿が無く思ひだすだけでもよい。土筆もつくしんぼといへば子供の頃を思ひだすキーワードなのだらう。それにしても展宏句は稚氣溢れてゐる。（以上・喜孝）

盆栽のやうに地球へ手を入るる

佐藤喜孝

過去帳に戒名無き日春ゆくや

堀内一郎

友禅とも岩根しぼりといふ椿

森山のりこ

焼そばの色付く様を花三分

森理和

用水路ボール浮びて水温む

山莊慶子

どの子にも春の来てをりランドセル

吉成美代子

婦恋の畦にころがる冬甘藍

吉弘恭子

医師に肺託して月余鳥雲に

渡邊友七

鉄橋にトロッコ電車山桜

赤座典子

タンポポやいつも使ひし竹箒

遠藤実

春涛に向ひて誰とも語らぬ日

鎌倉喜久恵

近道と思ひて迷ふ春の闇

木村茂登子



## 前月作品

柳の芽切り取り線はこちらです	篠田純子
白梅のつぶやき程のかわりかな	芝尚子
下萌えの夫のふるさと囁やかに	芝宮須磨子
露の臺ほおけてさうだ街に用	定梶じょう
歩くとは人のことなり梅日和	須賀敏子
つくしんぼ子供の頃の通信簿	鈴木多枝子
老人と子供の頭蝌蚪の水	竹内弘子
母戀ふは心よはき日わらび餅	田中藤穂
文旦の掌を洩る光かな	東亜未
菜種梅雨納豆ぐるぐる三十回	長崎桂子
春寒しシャベル沈めて川光る	早崎泰江
遠足の先生特に大食漢	藤野寿子

喜孝 抄



近世俳諧と漢詩文 2 式拾

王岩

姫瓜や三千の林檎顔色なし 自悦

白居易の「長恨歌」の表現を借りて詠んだ句である。

回眸一笑百媚生 眸を回らして 一たび笑えば 百の媚めかしさ生まれ

六宮粉黛無顔色 六宮の粉黛 顔色無し

•••••

後宮佳麗三千人 後宮の佳麗 三千人

三千寵愛在一身 三千の寵愛 一身に在り



玄宗皇帝と楊貴妃のロマンスを描いた長詩「長恨歌」の中で、絶世の美人楊貴妃と彼女が独占した皇帝との愛を描いたくだりである。自悦はこのくだりの表現を生かして、「姫瓜」（まくわうりの一品種）をユーモラスに描いた。恐らく「姫瓜」の姫から乙女を連想したであろう。自悦は京都談林派を代表する人物である。近世上方では「姫」は「遊女」を意味したので、これを加味して読めば、自悦の句は更に艶つぽさが増すのではなからうか。

さらに溝口素丸にも

画 賛

富士笑んで三千の山は顔もなし 素丸

同じく「長恨歌」の表現を生かし、富士山を描いた絵画の画賛として句を詠んだ。

妻の追善に

をみなへししでの里人それたのむ 自悦

李下が妻のみまかりし心をいたみて

ねられずやかたへひえゆく北おろし  
さびしさは秋向ふから来る我すがた  
卯月八日初て仏法ひろうめけり

# あをかき集 堀内一郎選

(六人目以降五十音順)



還暦を過ぎし五人の花筵

母よりも長生きをして花吹雪

一輪草少し強きに生きてきて

葉桜や阿修羅御仏若々し

失速の日々続くまま四月尽

仏殿の扉開かる花まつり

春風や僧衣つくるふ女人部屋

席取りの青いシートに散りはじむ

雑踏の中の静寂花ぐもり

外濠の小暗き方へ花筏

振花のねぢれて咲くも私流

庭梅の姿一変す一雨すぎ

女学生戯れながら行く夏近し

ひっそりと高台の家白牡丹

なんじやもんじゃ空の一面不思議色

氣象変る春のテラスの鉢ころぶ

氣象変る花の開花も従ひて

風呂敷は唐草模様花筵

須賀 敏子

木村茂登子

芝宮須磨子

花の寺戦国の世の連判状

うしろくる男が怖き桜の夜

棟梁の土産のわらびどさと煮る

花盈ちて人の不幸を聞く夜かな

集落に風そよそよと春祭

田中 藤穂

長崎 桂子

花冷の指の奏でる不調音

花冷や昼の酒盛り肩すばめ

たんぽぽと共に根を張り住み馴れし

春の鳶灯台守ることく舞ふ

母山羊と子ヤギ呼び合ふ夕桜

八重桜散りては土を桃色に

昭和の日日の丸むつきはためかず

昭和の日家居まつたり京料理

コンピューター管理の野菜昭和の日

咄家の七輪かまど昭和の日

行く春や三つ星となる高尾山

満月を借景として花吹雪

春の街犬の歩幅に歩をあはす

句心もそこはかとなく二輪草

春光や水草の沼ぼつと浮く

距離を置き蛙二疋が池の縁

春の夕芭蕉の聴きし水の音

大輪に俯き香る継母の薔薇

吉弘 恭子

早崎 泰江

鳩ときて鳩と下りたる花の坂  
日落ちる塞鼻にかへて花の酒  
花の夜東結びの贈りもの  
闇夜から一直線といふ春愁

渡邊 友七

名も知らぬ墓より墓へ青き踏む  
春炬燵きします妻や寝息もて

藤野 寿子

鳴引くやつぶやき眠る雨後の沼  
妻に添はれ芽立つ泉の音を聴く

赤座 典子

豆の花揺れて薄まる空の色  
片栗の花伏して撮る山男

森山のりこ

給付金ああと受取る暮の春  
水槽を真横に鮠の朱き腹

遠藤 実

夕立や検査のあとの医師の顔  
白玉や逝く人誰も無一物

森 理和

夕立の激しきハローワーク前  
大川に蛇口がなくて春の潮

鎌倉喜久恵

古屋敷あとかたもなき春の昼  
絵馬ひとつ裏がへりけり春北風

生憎や降り込められし花の宴  
桜しべ踏まねば小橋渡られぬ  
草笛や鼻にはなぢの綿を詰め  
春の雷隠し扉を開けて了ふ  
指それぞれ仏に見ゆる穀雨かな

篠田 純子

キリストも親鸞も好き伊勢詣  
トネルを出目潰しぞ富士の雪  
中腹の臍となりたる桜かな  
春の闇歩道一段高くあり

東 亜 未

婆羅門の肋の深さ暮の春

芝 尚子

いくらでも朝寝の出来てつまらなき

がんばれば嫌ひな言葉鳥帰る

ほろほろと卵の花風の在りどころ

花は葉に人はかへらぬ日を重ね

定梶しよう

石段の踊り場に居り春惜しむ

阿の獅子と叫の狛犬日永かな

かげろへる野路と踏切合ふあたり

夕蛙遠の家々灯しあひ

鈴木多枝子

葉桜や個展の知らせ恩師から

花冷や花の命の永からむ

花冷や葉ひとつを増やされし  
庭の露を明日送ると留守電に

## 一句燦々

花盈ちて人の不幸を聞く夜かな

藤穂

ともするとこのような場面に出合う。陽気の変わり目か  
身体に与える影響は大きい。花の陽性と不幸の陰性、世  
の中万事一切ここに納る。月満つれば則ち虧くである。  
とは言うものの。

母よりも長生きをして花吹雪

敏子

先日報道で女性八十六才男性八十三才の統計が出された。医療も食生活も良くなったからだ。花吹雪は目出度しの拍手である。「強き」の覚悟もご立派。

### 仏殿の扉開かる花まつり

茂登子

周囲のざわめきが伝わってくる。善男善女莊嚴への憧れはみな心の底に持っている。何がなしプラスになるようだ。念ずれば通ず。祈りだ。

### 振花のねぢれて咲くも私流

須磨子

花の生れつきで仕方無い。自身も振れた現象だと自覚しているから世話はない。それは純真さでもある。花も色々人もいろいろ。

### 氣象変る春のテラスの鉢ころぶ

桂子

強風の日が続く。気温も急上昇、気分も変わるほかなない。世の中の様子も上五にピツタリ。殺人、インフルエンザ等々。

### たんぼぼと共に根を張り住み馴れし

泰江

根を張りてで古参が知れる。たんぼぼの黄も生命共同体でしみみさせる。根を張りが総てを物語る。したたかに嬬やかに。

### 昭和の日日の丸むつきはためかず

寿子

そう言えば町に日の丸を見掛けなかつた。交番、バス、役所にはあつたが、目出度さが薄らぎ、おしめも少子化の影響である。先々が淋しい。不自由だつたが産めよ殖せよの時代がなつかしい。

### 行く春や三つ星となる高尾山

のりこ

仲間である「かまつか」で先日吟行した。私、他とち合い失礼。小学校五年生の時の遠足が思い出された。昔、軽蔑していた高尾山が脚光を浴びているようだ。これも尊厳効果。

## 春光や水草の沼ぼつと浮く

理和

水草を通じて大自然の息吹を感じとった。実景から先をすくいとったもので無心でないと突き当らぬ。一期一会の得難い作。

## 鳩ときて鳩と下りたる花の坂

恭子

鳩との生命のやりとりが、生への喜びを感じる。花の賞賛も殊更で一連の中で素直さに心ひかれた。

## 名も知らぬ墓より墓へ青き踏む

友七

必要に迫られて墓廻りか。ついでの踏青であろう。名も知らぬが淋しさを示し冷たい明るさを感じさせる。陰にこもった精神風景。

## 豆の花揺れて薄まる空の色

典子

豆の花と青空と一体化する。いや一体化させる女性の色彩感覚で融合により、心の安定を計るのであろう。「片

栗」「給付金」「鮠」新鮮さにめざとい。

## 夕立や検査のあとの医師の顔

実

身体を、思いを刺激する夕立の音。医師の顔色をうかがう患者の横顔は一瞬期待と不安が入り混じる。私も来月この様な思いをする。

## 古屋敷あとかたもなき春の昼

喜久恵

一帯が屋敷町でひそかな佇い。何時の間にか空地になつている。私の近辺も同じで、主の変転などを耳にする。私の処も二十五線上で立退きのための測定が近日行われる。あとかたもなき春昼、町がなくなる空しさ。

## 草笛や鼻にはなぢの綿を詰め

純子

エネルギー旺盛で羨ましい。若さの因は感度の鋭さ。何でも応じられる澆刺さは読み手も元気になる。「指それぞれ仏」も面白いが、「それぞれ」を「親指」と断定してもよい。

いくらでも朝寝の出来てつまらなき 尚子

自由とは不自由の対比。全て自由であると「つまらなき」となるようだ。

石段の踊り場に居り春惜しむ じょう

社寺の石段であろうか。居場所のない男の哀感を感じる。煙草でも口にくわえていれば絵になる。一抹のさびしさを奏でている。

花冷や葉ひとつを増やされし 多枝子

花への労りを見せるが、葉が増えるとは只事ではない。葉もあれこれ試されるから信頼するしかない。

キリストも親鸞も好き伊勢詣 東亜未

聖人神様には目がない。尊厳を身をあつめて自分を輝かすのである。神様も黙ってはいない。純真さが作品に表れる。

## あを吟行会のお知らせ

七月 角川庭園・幻戯山房

集合地 JR荻窪（新宿より改札出たところ）

日時 7月19日（日）午前10時半

句会場 詩歌室2

申込み〆切 7月14日

申込先 佐藤喜孝 090 9828 4244

六月 葛西臨海公園水族館

集合地 葛西臨海公園 駅

日時 6月21日（日）午前11時

今回は水族館を中心に吟行します。

尾

王

傷つきし尾をひき帰る枯野みち

堀内 一郎

退屈な百獣の王こどもの日

竹内 弘子

尾のはねる懸大根の白さかな

赤座 典子

いまの世の安壽廚子王鱒起

佐藤 喜孝

青桐やナムアミダブと蟬の語尾

田中 藤穂

信号待ちに苛つく神馬山王祭

篠田 純子

鳩尾のへこみが父似海びらき

竹内 弘子

秋高し仁王立ちにぞ満一歳

東 亜 未

名月に大寺の鷓尾呼應せる

木村茂登子

仁王門うごめく気配五月暗

芝 尚子

老い

終ふ

秋風や笑ふほかなし老いに老い

芝 尚子

秋高し千本鳥居終りあり

吉成美代子

墓守もわれも老いけり曼珠沙華

鎌倉喜久恵

五色沼巡りの終り山法師

須賀 敏子

夕月夜少年老いて風のやう

吉弘 恭子

雪搔を終へし道筋鮮しき

長崎 桂子

老いてなほ大き目標四月馬鹿

山莊 慶子

束の間の夢は終わりぬ牡丹雪

早崎 泰江

焼茄子や共に老いゆくふたりの餉

渡邊 友七

人知れず咲き終へてをり夏椿

森 理和

追ふ

大

齧落し水が水追ふ那智の滝

森 理和

吐く息の大きく白し馬の顔

鈴木多枝子

昼の虫追はるるやうに恋をせり

篠田 純子

露座仏の大きな耳朶に時雨降る

栢森 定男

枯葉散る風追ひ掛ける掛け競べ

長崎 桂子

蕎麦を刈る天に大きな影うごき

定梶じょう

とぶ蝶を眼で追ひ乳房はなさぬ子

渡邊 友七

白蛾飛び武蔵鐙の葉の大き

田中 藤穂

さよならの手で蚊柱を追ひ払ひ

鎌倉喜久恵

心做し大きくなりて墓

齊藤 裕子



# 四月の句会

傳 中野区 カフェ傳

鶯やいつも小暗き四疊半 藤 穂  
 啄木忌結核ニユース電光版 寿 子  
 バレリーナの指にさきまでさくら咲く喜 孝  
 高層にも回収車の声豆の花 典 子  
 大型犬に脛を嗅がるる薄暑かな 純 子  
 河馬よりもキリン誉めらるる春の風 敦 子  
 植樹祭よごれて涼し軍手かな 実 子  
 足長き子の来てすわる彼岸寺 弘 子  
 会釈してはて誰ならむ落椿 尚 子  
 寝転びし背はひんやりと昔菫 喜久恵  
 鉄鉦鈴座右に備ふ春の風 理 和  
 母くれし脳トレの本若葉風 裕 子  
 母よりも長生きをして花吹雪 敏 子  
 席取りの青いシートに散りはじむ 茂登子  
 春の鳶灯台守のごとく舞ふ 泰 江  
 日落ちる塞鼻にかへて花の酒 恭 子

調 さいたま市岸町公民館

花人をよけつつ急ぐ美術館 慶 子  
 連結鋸切り離しては夏山へ 友 七  
 花袋人の流れに逆らひて 敦 子  
 花の寺戦国の世の連判状 藤 穂

連翹の黄に染まりたりハイウエー 泰 江  
 連弾の親子レッスン暮岩葉 寿 子  
 しづかなる花をふまへる蝶の脚 綾 子  
 春のうつ不連続線にさいなまれ 弘 子

あを吟行会 神奈川近代文学館

どこまでもいつもでも春旅靴 純 子  
 春眠のやうなる虚子のデスマスク 茂登子  
 春の闇前歯の見ゆるデスマスク 綾 子  
 フランス山木暗を灯す枒の花 喜 孝  
 華鬘草過去覗くごと井戸のぞく 東亜未

七座句会 中野区・小川苑

蓋置に五徳の隠架四月かな 尚 子  
 隠り沼に足を洗ひし雪女 恭 子  
 ゆく春の隠坊草履干されあり 木 枯  
 初蝶が隠者のごとく脇通る 東亜未  
 隠しごと少しはありぬ四月馬鹿 須磨子  
 春の蠅忍者屋敷の隠し部屋 綾 子  
 日だまりに飛ぶ力溜め春の蝶 多枝子  
 いつの間にかくるごとく葉桜に 房 代  
 石五つ飛んで渡りし春の川 理 和  
 観覧車葉桜の地へ戻しけり 藤 穂  
 昭和また陰画となりぬ野蒜和 喜 孝  
 柿若葉大腿四頭筋のばす 夏 子  
 葉桜や気付かぬ振りも時として 純 子

連句勉強会 毎月第2日曜  
 12時半 中野坂上シヨナ  
 サン (090-9828-4244)

傳句会 毎月第2火曜  
 カフェ傳 森 理和  
 (03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜  
 岸町公民館 竹内弘子  
 (0488-86-3611)

あを吟行会  
 詳細は吟行案内で

七座句会 毎月第4火曜  
 小川苑 吉弘恭子  
 (090-9839-3943)

『俳句』五月号に『俳句界』三月号掲載の拙句を採り上げていただいた。多謝。

## 俳句月評

仙田洋子

### 引潮に春の地球のかしぎゆく

佐藤喜孝

引潮ごときで地球がかしぎはずはない、などと言っているのは到底詩歌には携われない。引潮と一緒に引き込まれてしまいそうな海、それもつつりするような春の海であれば、地球が傾いでも不思議ではあるまい。エルサレム賞の授賞式でへ村上春樹は小説家を「嘘を紡ぐプロ」だと言った。ほぼ百パーセント虚構で勝負する小説家とは比べものにならないとはいえ、俳人も時には、事実の中に数滴虚構のエッセンスを垂らすのがいいようだ。

(『俳句』五月号より転載)

『あを』も大分発行日が早くなってきた、と思ふ。いま少し早く発行したい。毎月末の原稿×切日にご協

力頂いて感謝してゐる。

あを柳集(佐藤喜孝選) 投句要項

第一回「杉」

×切 六月末日 用紙・句数自由

第二回「深」

×切 七月末日 用紙・句数自由

送付先 東京都中野区中央二の五〇の三

二〇〇九年六月号

発行日 六月一日

発行所 東京都中野区中央2-50-3

電話 090-9828-4244

佐藤喜孝

印刷・製本・レイアウト 竹徳房

カット／恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

郵便振替 00130-6-55526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。